



# 月歩学歩



「げっぼがっぼ」と読んで欲しいが、その意味は、“月日を歩き、学んで歩く”ということ？



## 特集

### 第43回卒業式 ～卒業生を送る～

【短大での2年間、また、保育の現場でも、私たちの“保育を学ぶ”という考え方・実践は、確実に自らを成長させていくものです。

どうぞ、皆さんはそれぞれの現場で、精一杯成長して下さい。お互いが成長し合える、保育の世界を担う仲間であり、同志であってほしいと願っています。短大は全力で皆さんを支持していきたいと考えています】  
( 籠 光夫 )

#### その他の内容

- ◆ 卒業生の回想とメッセージ (宮田 栞) 3-7P
- ◆ 卒業生を送ることば (今村 彩香) 7-9P
- ◆ 学長式辞 (籠 光夫) 9-12P
- ◆ 理事長祝辞 (福中 儀明) 12-14P

#### キャンパス・ライフ

- ◆ 研修生制度 1期生 修了 (石川 優子) 15-19P



# 特集 第43回卒業式

～卒業生を送る～



## 第43回卒業証書授与式次第

平成26年3月15日 午後1時 於：講堂

開式のことば

証書授与

学長式辞

理事長祝辞

来賓・講師紹介

卒業生を送ることば

卒業生の回想とメッセージ

卒業記念品贈呈

千葉県私立大学短期大学協会会長表彰

校歌斉唱

閉式のことば

在校生代表 今村 彩香

卒業生代表 宮田 栞

学友会会長 松坂 裕太

島 綾音

ピアノ伴奏 森谷 夏実

### 卒業生の回想とメッセージ

宮田 栞



明德で過ごしてきたこの2年間、私たちは何を学んできたのでしょうか？“学ぶ”とは一体どういうことだったので

しょうか？

2年前の4月。小学生の頃からの夢だった保育士になるためにこの学校に入学しました。優しく可愛い幼稚園の頃の担任の先生が私は大好きでした。そしていつしか保育士になることが私の夢になりました。当時はまだ、保育士と幼稚園教諭の違いさえわからず、保育士になることが夢だと言っていました。入学するまでの保育者のイメージは「優しく可愛くて子どもた

ちと毎日遊んでいる人」でした。しかし実際に実習に行くようになってから保育者は簡単な仕事ではないことを知りました。途中で「私は保育士に向いていないのかもしれない」と思い悩むこともありました。でも子どもたちはどんなときでも可愛く思えたので、保育士になる夢を諦めることは出来ませんでした。

今、2年間を振り返ってみると本当にあつという間でした。私たちは2年間の中でたくさんの実習を乗り越え、今どれだけ覚えているかと言われるとほとんど覚えてないかもしれませんが、保育の知識を増やし、たくさんの人に出会い、たくさんの場所へ行きました。楽しかったこと、辛かったことなどたくさん経験して2年前よりも成長したと思います。

1年生の前期、総合演習の授業でまだ名前も知らない人たちとグループを組み、話し合いをすることの意味が全くわかりませんでした。どうして先生たちは私たちにこんなことをさせるのだろう、私たちは何故こんなことをしなくてはならないのだろうと思っていました。それはほとんどの人が思っていたはずです。時計ばかり見て「なんで授業終了の時間、過ぎているのにまだ終わらないの？」ということばかり考えていました。また、グループを組むときは常に友だちと一緒にいい、知らない人たちの中には入っていけないと思っていて、友だちの意見に流される、友だちの意見を流すということをしていました。だからつまらなくはなかったけど充実した活動だったとは言えません。正直、フィールドワークをさぼったこともありました。

しかし、後期から始まる模擬ゼミで自分が何をするのか決めるとき、友だちの意見には流されず自分のやりたいと思ったものを正直に言い、どこで何をしたいのか、自分で決断することが出来ました。この時何故出来たのか、それは周りや友だちの目が気にならなかったからだと思います。前までは、わたしがこれをやりたいと言ったら友だちはどんな反応をするのだろうか、「え〜」と言うのではないだろうか、ということばかりを気にしてなかなか言い出せなかったことが、この時、出来たのです。きっと心のどこかでもっ

としっかり授業に取り組まなくては、このままではいけないと思っていたのだと思います。自分で決断することが出来た！と思ったとき、とても嬉しくて、自分が変わったような気がしました。模擬ゼミでは保育現場の見学をするグループにいましたが、今思い返すともっといろいろな現場を見てみたかった、もっとたくさん現場に行ければ良かったと思います。しかし興味を持って取り組んだことなので、とても楽しくて充実していました。先生たちに“やらされている”という感覚から“楽しそう、私もやってみたい”に変わっていきました。

明德の先生方はわたしたちの言ったことに対して「なんで？」と聞いてくることが多いです。最初はそれに戸惑ったし、「なんで？」と聞かれ考えても自分でも全然わからないのです。わからないから途中で考えることを放棄したこともありました。でもだんだん先生方の「なんで？」が自分に移ってきて「これってなんでなのだろう？」と考えることが増えました。考えて、考えて、考えて。どんなに考えても答えが出ないこともあったし、自分自身と向き合わなくてはならなくて苦しいこともありました。でも「なんで？」と考えることは保育の中で大切だと思います。

明德に入学して学年・学校全体の話し合う場が増えました。印象に残って

いる話し合いは模擬ゼミの発表会で  
す。誰かの言葉に傷ついたり、自分の  
言葉で誰かを傷つけてしまったりした  
かもしれません。時には教員からでは  
なく同じ学生という言葉から考えさせら  
れたり、怒ったりもしました。でもこ  
ういう話し合いの場がなかったら相手  
の気持ちを考えたり、自分の思ってい  
ることをどう相手に伝えるのかを学ぶ  
ことは無かったと思います。

また、明德に入学して、考えること  
と書くことが増えました。最初は「何  
でこんなにたくさん書くの?」「枚数  
多くない?」と感じたことも実習を通  
して書くことの大切さを知りました。  
考えたこと感じたことを全部覚えてい  
られるわけではないからこそ書き残す  
ことが大切だと気付きました。2年生  
になってからは「年明け早々からこん  
なに書かせないでよ。」と言ったこと  
もあったけれど書く力が着実について  
きたことを実感することができました。

また、昨年卒業パーティー委員の  
先輩方に出会ったことも私の短大生活  
の残りの1年間を大きく変えました。  
何でも出来て、優しい先輩たちと話す  
機会が増えて学年の違う人と関わるこ  
とはこんなに楽しいのだと知りまし  
た。そこからは学校行事に参加するよ  
うになりました。スポーツ大会では1  
年生と一緒にグループを組み他のチー

ムに勝てるように頑張りました。1年  
生とどうやってコミュニケーション取  
っていったらいいかな?と考えながら  
やっていたことを覚えています。学園  
祭では飲食団体をするサークルをまと  
め、当日まで時間が余りない中、プリ  
ントを作成したり、友だちと遅くまで  
残って装飾を作ったりしました。他の  
委員とたくさん話し合いを重ねなが  
ら進めていきました。行事では、思い  
が伝わらず葛藤したり、お互いの頑張  
りを認め合う余裕もなくギクシャクも  
しましたが、楽しみながら他の学生に  
自分の思いを伝えたり、相手の思いを  
聞きながら一緒に頑張っていくことの  
大切さを学びました。

実習ではたくさん子どもたちと出  
会い、たくさんのことを学んできました。  
睡眠時間が減る、実習録がなかなか  
書き終わらない、指導案が上手く書  
けない、部分実習、責任実習は思うよ  
うに上手く出来ないと大変なことはた  
くさんありましたが、それでも無事に  
終わると達成感があって、実習をして  
良かった、子どもたちに出会えてよか  
ったと思えました。

最後の保育実習IIで保育者との関係に  
悩んで実習を辞めたくになりました。思  
うように上手くいかず、金先生に「実  
習を辞めたいです。」と話しました。  
先生は私の話をたくさん聞いてくださ  
りました。大泣きしながら電話し、な

にを言ってるのかわかりづらいにもかかわらず、友だちは1時間も話を聞いてくれて私のことをとても理解してくれました。「頑張り過ぎなんだよ。どこか少し力を抜きなよ。」と言ってくれました。2人の言葉にもう1度実習を頑張ってみようと思えました。それまでの実習ではどんなに辛くても辞めたいと思ったことは無かったし、途中で辛くなっても、子どもたちの笑顔、存在に助けられて途中で辞めることなく続けることが出来ました。「向いていないかも」と思っても結局は子どもたちが好きだから私は保育者になりたい！と思ってきましたが、この実習で保育者として働いていく自信を失くしました。

そんなとき、研修生という制度があることを思い出しました。研修生という形で就職をすれば、現場の保育者の姿から学べると同時にそこで出会った子どもたちのことを仲間や先生方と考えることが出来るということで研修生もいいなと思い始めました。しかし自分は逃げてるのではないかという葛藤もありました。研修生のスクーリングに参加して、自分の園の保育や自分の保育について考えている先輩方を見て、それまでは研修生をすることを悩んで決めきる事が出来なかったけれど、私もこんな風になりたいと思い、研修生をする決心をしました。1度、両親に話したときは、反対されるような気がして研修生をしたい理由が言え

ず、ただ「研修生がしたい」と話すと正職員ではないということで反対されました。しかし、やはり正職員で働く自信もなく、1年間研修生として勉強しながら働きたいと思い、日にちを空けて、正直に理由を話すと理解してくれました。たくさん考えて辛い思いもしたけど、実習でつまづかなかつたら私は“研修生”という進路は選ばなかつただろうと思います。保育者になって「現場で働きながら保育の勉強をしたい」なんて思わなかつただろうと思います。

卒業生のみなさんも1人1人それぞれがいろいろなことに悩み、葛藤してきたことだと思います。明德で感じたこと、考えたことを大切にそれぞれの現場でこれから頑張っていきましょう。

2年間、私たちを支えてくださった先生方にお礼申し上げます。誰もがこの2年間のどこかで必ず教員や事務の方々に助けてもらったはずです。実習のことや就職のこと、単位取得やゼミなどで相談に乗っていただきました。いつもどこかでわたしたちのことを気にかけてくれていて、声を掛けてくださった優しさがとても嬉しかったです。

そして両親にも感謝の気持ちでいっぱいです。私には5つ下の弟がいて、高校生の時、進学するつもりはありませんでした。けれど「資格を持っていたほうがいい」と進学を勧めてくれました。厳格に育てられたためたまには

「ほっといてよ」「うるさいな」と思うこともあるけれど、あの時、私の背中を押してくれていなかったら、保育者になるという夢を諦めて後悔していたかもしれません。また最初は反対された研修生になることも最後は理解してくれたから4月から私は明德土気保育園で研修生として働き始める事が出来ます。

私は、今はまだ、2年間で何を学んだのか簡単に言い切ることは出来ません。あのとき、こういう意味だったのかと後から気付くことも学びだと私は思います。これからも自分のことを信じて、学び続けていきたいと思います。

本日は私たち、第43期卒業生のために、このような心のこもった式典を挙げていただきありがとうございます。またご多忙の中をご出席下さいましたご来賓の皆様、学長はじめ諸先生方、並びに関係者の皆様に、卒業生一同からお礼申し上げます。

平成26年3月15日  
卒業生代表 宮田栞

## 卒業生を送ることば

今村 彩香



2年生の皆さま、ご卒業おめでとうございます。

皆さまの卒業式

が、こんなに早く来るとは、信じられないような気持ちと共に寂しさがこみあげてまいります。皆さまは、学友会活動や実習等での学び合い、プライベートなどで、心強い先輩として、熱心に私達をリードして下さいました。

私は、同じ高校の先輩から、「学友会活動をもっと盛んにしたい」という気持ちを伺い、私でも力になれるよう頑張りたい！と思い、学友会副会長になりました。学友会の先輩方は、それぞれ強い思いがあり、1・2年生の交流を深めようと色々考えて下さいました。学園祭では、学友会主催で駄菓子販売したり、実行委員を支えたり協力しながら行うことができました。しかし、ハロウィンパーティーやクリスマスパーティー、スポーツ大会など幻に終わった多くの企画もありました。私たちに自信が無かったこともありましたが、皆が一丸となって実行する難しさがありました。学友会を通して、人への伝え方、組織のまとめ方、1・2年生の関係のつくり方、またねらいをもとに計画、実行していく事の難しさを学びました。

先輩方とは、実習の振り返りやその発表、わくわく体験研修の発表、現代社会論など、授業の中でも多くの交流がありました。先輩方の普段見せない一面や特技を知ることができました。その中でも、「学びの成果発表会」で

は、2年間で学んできたこと、してきたことが、一人ひとり異なり、時間の足りないくらい興味のある発表がたくさんありました。会場に、ある先輩が作った手袋人形や、手遊びをまとめた作品集がありました。憧れていたその先輩は、音楽を使った保育についてまとめて発表をしていました。ポスターだけでなく実際にCDに録音した自分の演奏を流しており、これからの保育で大切にしていきたい考えがとても伝わってきました。その後プライベートで遊びに行った時に話を聞き、色々なことに挑戦して自分の特技を現場で生かそうとする姿は輝いて見えました。私も2年生になった時に、後輩に、自分の学んできたことをはっきり伝えたり、自分の理想とする保育を語りたかと思いました。

学校帰りや、休みの日に先輩方とお話できる機会もありました。自分だけだろうと感じていた些細な悩みは、実は先輩方も同じような時期に同じように感じていたということを知り、心が軽くなりました。とてもおかしなことですが、お昼のお弁当をどのグループで食べるか戸惑う人もいます。そんな些細なことで悩んでいた私たちに、ある先輩が、「自分も悩みトイレで泣いたこともある」と話してくれました。「私たちだけではない」と強い味方ができた気がしました。私たちにとっていつも一歩先にいる先輩の話を知

いたり、時には友達のように気軽に話かけてくれる先輩方との関わりがとても楽しかったです。はじめて二週間実習をしている最中、余裕のない私に、先輩から「実習、どう？」とLINEで心配して貰い、自分の気持ちを受け止められ共感してもらえた気がして、大きな支えとなりました。

これから、私は、学友会の活動をもっとしていきたいと思えます。1・2年生の交流を深める機会を作り、もっといろいろな人が関わり、想いや気持ちも後輩にもっと伝えたいと思えます。この1年で感じてきた難しかったことも糧にして、友達のように気軽に話せる関係が、後輩とも作れるような学校にしていきたいです。

卒業後も、現場の先輩として私達を待っていただけたらと思えます。また、時には母校を訪ね、私達を励まして下さい。お待ちしております。皆さまのご活躍を心からお祈りし、送辞とさせていただきます。

平成26年3月15日  
在校生代表 今村彩香

### 今村さんの「卒業生を送ることば」 石井章仁

今村さんは、学友会をはじめ、様々なボランティア活動ほか、実に多くの活動に興味を持って参加する、意欲を持った人である。彼女は、ゆったりと

人当たりも良く、いろいろな世代、タイプの人と実に柔軟に関わることができる人でもある。

T幼稚園での実習時、5人の実習生の中で、担任保育者との反省会時にいつまでも話し込む姿があった。他の実習生は早々に“緊張する反省会”から戻るのに、彼女はいつまでも戻らなかった。保育者の話に興味を持って聴き、自分の中に取り入れようとする気持ちが強い人でもあることに加え、時にはリラックスして、担任と「おしゃべり」をすることができていた。

一方、彼女の課題は考察をすることである。「これはなぜか」「この言葉はどんな意味を持つのか」など、かわりながら子どもや人の言動からその理由を探ることは2年次の大きな課題となる。そのおもしろさに少しでも気づけるようになったなら、今後もっと大きな人となるはずである。そんな印象をこの1年で持った。

## 学長式辞

簾 光夫



ただ今、卒業証書を授与された卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。

卒業生の皆さんの前で、私から話す事も最後となりました。改めて、“保育を学ぶ”ということ、そして“保育に生きる”ということをお話してみたいと思います。このことは幾度となく話して来たことですが、少し整理しながら話してみたいと思います。

皆さんの明德での2年間は、保育を学ぶ時間でした。“学長ランチ”の場で、何人かの人が「アッという間の2年間だった」と話していましたが、多分そうだったろうと思います。短大の2年間、アッという間の時間の中で、皆さんは実に沢山の人たちと出会いました。

フィールドワークで出会った人たち、実習生として、子どもたちに出会った人数は、どの位になるでしょうか...また、ハンディキャップを持って生きている人たち、私たち大人でさえ背負い切れない重さの荷物を背負って生きる子どもたちとも出会いました。皆さんの明德での2年間は、こうした様々な人たちとの出会う機会を持った、保育を学ぶ場での“2年間”でした。

私が何度か語り、問いかけたことは、1つのことです。

沢山の出会った人たちの中で、たったひとりでもいい、目をつぶった時、脳裏に思い浮かぶ人がひとり居ますか？そのひとりの人との場面場面が思い出され、描かれますか？

そして思い出されるまま記述することを進めてきました。私のゼミの仲間の人も、丁寧に記録し、書き直し、考察した人が居ますが、丁寧に記述すること、記述したものを読み直してみる...そして、考察する。自ら記述した文章（エピソード）を読み直す...不思議と、その時の子どもと自分の姿が浮かんでくるのです。一緒に読んでいる私にも伝わり、絵になってくるのです。

あの時、子どもの気持ちを真剣に考え、受け止めていたか...いなかったのか...その子の悲しそうな顔つきまで浮かんでくる...自分がしっかりと気持ちを受け止めていなかった。大変な誤解をしていたことに気づく...

ずいぶん時間が過ぎてしまった。今更、どうすることもできない!!このことに気づく...すると、そうしてしまった自分と向き合うことになる...これが保育を学ぶ第一歩だと、私は思っています。

この他者と向き合うこと、さらに自分と向き合うということ...この作業はひとりの人間同士が正面から向き合い、理解し合うことです。同時に、他者の立場で考え始める、相手の立場で考える、人間同士が理解し合う、という学びを獲得する第一歩を踏み出すことになる。この過程で、大人へと成長していくことにつながるのです。保育を学ぶ面白さ、保育の世界の奥深さに、私たちを惹き込むのです。

私たちはこうした保育を学ぶ2年間という時間を、どこまで共有できていたのかどうか...もう一度、お互いに問いかけなければならないと思います。特に、2年の後期の取り組みは、実に多くの学びを可能にする時間であったと思っています。

しかし、この学びは2年間で終了するものではないと思っています。

卒業して4年目になる田中葵さんのお便りを紹介し、保育を学び、保育に生きるということについて、話してみたいと思います。田中さんは、帯広（\*編集：北海道）の保育園に就職し、昨年こんなお便りを寄せてくれました。

.....

働き始めて3年が経ちました。1年目に0歳児、2・3年目は1歳児クラスで子どもたちと関わっていく中で、子どもたちの姿にとっても勇気づけられています。生まれてから1年とちょっとしか経っていなくても、その中で子どもたちは自分の力で立ち上がり、歩き出して、自分のことを自分でやってみようとし、友達を意識しています。赤ちゃんと呼ばれている子どもたちも大人と同じような感情があり、いろんな葛藤をしながら過ごしているのだと子どもたちの姿から感じています。

1年目の時に関わっていたAちゃんは、入園した頃から全身の筋肉が柔らかく、歩き始めも周りの子よりゆっく

りでした。そして、Aちゃんは周りの子が歩いている姿を見て、自分も歩きたいと泣くことがありました。ハイハイを嫌がって、歩かせてと大人に泣くこともありました。そのAちゃんがはじめて歩いたのは、次のクラスにあがる少し前の3月末でした。Aちゃん1歳半の頃です。

Aちゃんが自分で床から手を離して立ち上がりました。そして2・3歩ほど歩いたところで転んでしまいました。しかし、Aちゃんはとても嬉しそうでした。「自分の力で歩いたぞ！」という笑顔でした。それから、Aちゃんは自分で立ち上がって歩き始めたところへ戻って、もう一度立ち上がって歩こうとしたのです。生まれてから1年少しでも、悔しさや達成感を感じ、自分でもう一度やってみようとするこの姿に私はとても感動しました。そして、本当に、子どもってすごいな、と勇気づけられました。

子どもたちと関わる中でも、自分の弱さや直したいとことがたくさん見えてきて、苦しくなることもあります。でも、そこでどうしたらいいのか、ひとつひとつ考え、関わりを振り返り、自分の考えにしていけたらいいなと思っています。

.....

もうひとり、昨年卒業した男性Kくんを紹介したいと思います。つい先

日、「先生いいですか。」と部屋を訪ねて来て、「初めて先生と話します。この1年間、加藤先生に紹介された仕事をやって来ました。加藤先生にはどう感謝したらいいかわからない。本当に面倒をみてもらいました。友だちに聞いても、ここまで面倒を見てくれる学校はありません。私は明德に入り、明德を卒業して良かったです。本当にありがとうございます。また、報告に来ます。」

彼は資格を取得できず、卒業してどう生きようか悩んでいる時、加藤先生に「生活介護事業所」を紹介され、アルバイトで働いています。ここでは、自分の力では歩く事も食べることも、トイレに行く事も、着替える事も、お風呂に入る事も...人として生活していく全ての事を、自分ではない人の手によって営まれる、その人たちと毎日向き合っています。「生活を介護」する事、不快にならないように、快適に過ごしていただけるように介護する仕事をしています。そして加藤先生に次のようなレポートを提出しています。

.....

この仕事を始めて感じたことは、この施設に通ってくる方々が、一生懸命生きている“生きる力”でした。

自分のこれから生きていく人生の中で、常に“ある人との関わり”を深く考えるようになって、これからももっと

新しい“人と関わる”ことを考え、広げていってくれるのではないかと思う。

.....

まさしく、相手の立場を全面的に受け入れることで、生きる喜びを感じとり、彼という人間を成長させている。ひとりの人間の姿であると思います。

このように、短大での2年間、また、保育の現場でも、私たちの“保育を学ぶ”という考え方・実践は、確実に自らを成長させていくものです。そして、今日本の社会の中で、最もないがしろにされているひとつであると思っています。人が人として、その尊厳が大切にされること。ひとりの子どもと向き合って、その尊厳に気づく学びを獲得し、その積み重ねを大切にしていく。社会や組織、集団を形成していく、最も基本であり、大切にしていくものです。この当たり前の原則を、保育に学び、気づき、獲得し合い、成長し合う。これが保育の世界に生きることなのだと思っています。

どうぞ、皆さんはそれぞれの現場で、精一杯成長して下さい。お互いが成長し合える、保育の世界を担う仲間であり、同志であってほしいと願っています。短大は全力で皆さんを支持していきたいと考えています。これで、学長の式辞とします。

## 理事長祝辞

福中 儀明



只今、卒業証書を授与された卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。またご家族の皆様方もおめでとうございます。

皆さんは千葉明德短期大学の第43回の卒業生になります。二年間の努力の甲斐あって、きょうの卒業を迎えることができたわけであり、その学習内容を生かし、これからのそれぞれの進路先での一層の活躍を期待しています。

さて、今の世の中の話は、相変わらずの少子化・高齢化・若者の雇用問題、さらに3年を経過してもまだ十分に進んでいない震災被災地の復興・経済とエネルギー等々、解決の難しいさまざまな問題があります。

これらの中で皆さんがこれから携わる仕事に直接関連するのは、少子化、ということになるでしょう。

少子化を解消するために「少子化対策」という政策が政府や自治体で実行されていますが、私は「少子化対策」という言葉を聴くたびに腹を立てています。それはなぜか——「対策」という言葉は「ある出来事や事件に対応し処理するための方法」という意味です。そして、ある出来事や事件というのは、あまり起こってほしくないことを

対象とするのが普通です。たとえば「地震対策」とか「学校でのいじめ対策」とか「テロリズム防止対策」などと使います。

「少子化対策」を計画する人は少子化は困ったことだと考えているのでしょう。一方私は少子化は困ったことだとは考えていません、が、これについては後で述べます。

「少子化対策」という言葉を聞いて腹が立つのは、これを計画する人は子どもを頭数でしか見ていないということです。子どもの数を増やすことよりも子どもひとりにかける保育の質を高めることのほうが重要であることがわかっていないんです。

子どもを育てるのに「対策」などは要りません。でもこのことは皆さん2年間の勉強でわかっていただけたことと思います。

さて、「少子化対策」を計画する人はまず少子化の原因を特定します。しかし今言われている少子化の原因は間違っていると私は考えます。

生まれる子どもの数が少ない国は、すでに人口が多すぎる国、人口密度の高い国ではないか？そういう仮説を立てて調べてみました。世界には国が約200あります。全ての国の合計特殊出生率と人口密度を調べてみました。そうすると人口密度の高い国は子どもが少ない、低い国は子どもが多い、という相関関係が出てきました。考えて見

ればこれは当たり前のことです。過密な国に住む人々はこれ以上過密になることを望んでいないわけです。

日本を基準にして考えてみます。日本の合計特殊出生率は1.4、人口密度は1平方キロあたり330人です。日本より過密で、かつ合計特殊出生率も高いという先ほどの相関関係から外れる国はないのか？調べてみると18カ国ありました。しかしそのほとんどは面積が日本の百分の一くらいの小さな島国か、都市国家でした。これは例外でしょう。ある程度以上の面積のある国で、日本より人口密度・合計特殊出生率共に高いのは4カ国だけ、オランダ・ベルギー・インド・バングラデシュです。オランダ・ベルギーは平坦地が多いので実質人口密度は日本と変わりません。合計特殊出生率は日本より多く1.8ですが、2.0より少なければ人口減少傾向にあることは日本と変わりません。従って過密でありながら人口が増えている国は合計特殊出生率2.2のバングラデシュと2.6のインドだけです。

では日本の人口減を止めるためにバングラデシュとインドを見習わなければいけないのでしょうか？まさか、それはありません。両国政府とも人口増加を抑える政策を出しているけれどなかなか効果が上がっていないのです。インドでは女性の人権が守られず、最近、バスの中で女性が集団暴行されて殺害されるという悲惨な事件が起こったばかりです。こんな国を見習う必要はありません。

繰り返しますが、インド・バングラデシュの例外を除いて、人口密度の高い国は合計特殊出生率が低い、ということです。人々は今以上の過密な国になることを望んでいないということです。日本もそうです。日本の少子化は国民の意思なのです。だから少子化対策はムダです。

私は——少子化大歓迎です。日本の人口が減り、過密が解消され、ゆとりある生活ができるようになり、資源もエネルギーも今より多く配分できるようになります。私の考える日本の適正人口は3000万人です。今の1/4です。江戸時代の終わりから明治時代の初めごろの日本の人口は3000万人です。そこまで減らしたい。

少子化が進みさらにこどもが少なくなると、保育者が失業してしまうのではないかと心配する人はいませんか？それは大丈夫。そうすぐには適正人口にはなりません。100年以上かかります。22世紀中にも無理でしょう。私の見積もりでは日本の適正人口3000万人が実現するのは23世紀です。遠い未来です。心配は要りません。

そして23世紀になっても保育者は必要です。老人ばかりの国になるわけ

ではなく、子どもと大人と老人とそれぞれの数がバランスした安定した社会になっているはずですから、当然保育者も必要です。あなたたちの仕事は人類が存在する限り永遠に続く仕事であると考えてください。

ですから少子化を心配する必要はないんです。心配している人は今私の言ったことがわかっていない愚かな人です。そんな人に付き合う必要はありません。

保育組織は少子化対策として存在するものではありません。子どもを元気に健やかに育てるためにあるのです。そのために明德は「総合保育創造組織」として行動していきます。

皆さんがこれから出て行く世の中、ほかにもいろいろ問題があるでしょう。しかし、教育・保育という仕事の尊さは永遠のものです。子どもの数が減れば逆にその重要性がますます大きくなっていきます。

子どもを愛して、子どもの幸せのために力を尽くしてくれることを期待し、理事長よりの卒業のお祝いのことばといたします。



## キャンパス・ライフ

### 研修生制度 1期生 修了

石川 優子

研修生制度・こども臨床研修コースは、2013年度から新たに始まった取り組みです。「幅広い知を持ち、様々な角度から子どもを理解しようとし、子どもの生活及び子どもとの生活のあり方を問い続ける姿勢を持つ保育者の育成」を目的とし、開設しました。今年度は、第1期生として、卒業1年目の卒業生を中心とした5名が研修生の課程を修了しました。

研修生は、本学研修生制度にご理解ご協力くださった各保育現場に日々勤務しながら、月に2～3回保育後の時間に学校に集まり、スクーリングとして保育実践の振り返り等を行う他、以下のような取り組みを行ってきました。

- ・保育臨床講座（乳児保育について：副島民恵先生をお招きして）、1回
- ・相互保育見学会（お互いの勤務・研修先を見学し合う機会）、4回
- ・県外保育研修会（北海道帯広市、和歌山県新宮市、山形県最上郡金山町、沖縄県の保育園やこども園を見学。見学のみに留まらず、園内研修への参加や見学先の保育者との意見交換の場にも参加）、4回

・自主事例検討会（秋に研修生の発案により実施）、月2～3回

各勤務先の先生方には、このような研修を行いながらの勤務を受け入れご支援くださいました。誠に感謝しております。

このように1年間を通して、様々な角度から保育について考えてきたことを、最終的には、各々一つのテーマを設け、レポートとしてまとめました。何をテーマにするのかを、迷い、自分自身と丁寧に向き合う必要が出てきた研修生や、学生の頃に保育をする上で大事にしようと思っていたことにずっと拘りながら、実践の中でより具体的に自分の思いが見えてきた研修生など、5名の研修生がそれぞれのテーマで書いていきました。また、書くにあたって、そうすんなりは行かず、1年間の子どもの生活を問い直す中で、子どもと真摯に向き合い、自分自身と向き合い、時には辛い思いをしながらも、今の自分なりの結論を導き出していきました。その姿勢は、同じ保育を学ぶ仲間として尊敬すると共に、表向きにはプログラムを提供している側の

私が沢山の刺激を受け、研修生に支えられていたように思います。それは、研修生それぞれのレポートのテーマと概要をご紹介します。

氏名／研修先	テーマ	概要
今井 美希 (千葉明德短期大学附属幼稚園)	人との関係性の中で～Ｙちゃんの変化と保育観の変化～	一人の子どもが子ども同士の関係の中で成長していく姿に触れ、自分の見方や、子どもとの関わりについて振り返り、保育観が変化していく。また、自分自身も研修を通して様々な大人と接する中で変化していったことを重ねて考え、子どもも大人も関係性の中で変化していくことに気づく。改めて子どもも同じ人なのだと気づき、子ども自身が気づき育つのを待ち、支えられる保育者になりたいという思いを明確にする。
稲毛 瑞月 (第二勝田保育園)	私が求めていること	自分自身が違和感を覚えた事例、子どもと関わり遊びが発展していった事例を考察しながら、自分が保育の中で“子どもが選択し判断すること”を大事にしようとしていると述べる。加えて、事例から自分の関わりを考察し、遊びの拠点に自分がある（自分がいることによって遊びの拠点となる）こととその意味についても考えていく。一方で、自身が大切にしている子どもの自己判断・自己決定が、自身には出来ていなかったこと、自分もそうありたいと求めていたのだと気づく。
岩木 茜 (若竹保育園)	1年を振り返って〈子どもにとっての遊びと楽しさ・自分の気持ち〉	県外保育研修で子どもたちと泥遊びを真剣に行ったこと、そこで自分自身が“楽しい”と感じたことがきっかけとなり、自分が動的な遊びを楽しいと感じる傾向があり、子どもの遊びを見る時にも動的な遊びにばかり目が行っていたことに気づく。そこで、子ども一人ひとりが遊びの中で何を楽しんでいるのかに目を向けると、保育者の関わり方が子どもに応じて変わること気づく。子どもの楽しさを理解しながら関わりたいという思いを明確にする。
齋木 愛 (明德土気保育園)	子どもの気持ちに寄り添うとは～現場に出て見えてきた保育観～	学生時代から大事にしたいと考えていた「子どもの気持ちに寄り添う」ことを軸に、保育者になった今、具体的な事例を通して考え、大事にしたいと思って保育していても難しさを感じ出来ずにいる自分に気づく。また、県外保育研修で行った2つの保育園で感じてきたことと自分の子どもとの関わりを重ねて考え、「子どもの気持ちに寄り添うとは、子どもが自分で判断することを待つこと」と、より明確にとらえ直す。このように具体化して子どもと関わると、新たな子どもの姿を発見することができた。

高橋 いづみ (明德そでの 保育園)	研修を通して 見えてきた私	研修生として学ぶ中で、子どもの姿を記録してみると、自分の子どもに対する見方に偏りがあることに気づき、改めて客観的に自分の事例を読み直してみる。その中で、自分の子どもに向ける眼差しの癖に気付く。また、保育者として子どもをどのように見ていくのか、周りの保育者の考えを聞いたり、他の園に見学に行く中で、子どもの気持ちを受け止めることを大事にしていきたいと述べる。同時に、そう述べながらそれがどのようなことなのか納得出来ずにいることを感じ、改めて考え始める宣言をした。
--------------------------	------------------	--

～研修生の感想～

高橋 いづみ

この一年は、はじめての一人暮らし、はじめて保育士として働くことに加え、毎日早番勤務だったので、自分の生活と仕事に毎日必死でした。そして月2回のスクーリングの日は学校に行くのもやっとで、疲れていることもあり、話していても耳に入っていないことが多く、その状況は9月頃まで続いていました。しかし、9月が過ぎて担当する子どもたちもようやく園生活に慣れてきた頃に、私もやっと研修にも身が入るようになりました。他の研修生の事例をもとにみんなで意見を出し合ったり、私自身も子どもたちの姿などを記録して研修生同士で読み合ったりしました。また、県外に研修に行ったり、他の研修生の勤務する園に行く機会もあり、同じ0歳児クラスの保育士のかかわりや環境など見ることでたくさんの刺激を受けました。

研修生もまとめの時期になり、今まで書いた事例を読み返し、もう一度その時の自分の気持ちを正直に書いてみ

ると、子どもを見る時に偏りがあることに気づきました。さらにそんなことを考え始めた時に研修生の勤務する園に行ったことで私が大事にしたいことや実践していきたいことを見つけることができました。

私は学生の時から人の意見を鵜呑みにして、自分の意見はあまり発言せず、自分の意見を大事にしていなかったように思います。しかし、1年研修生をしてきて今やっと自分が大事にしたいことが見つけられるようになりました。実践でどのように生かせるかなどはこれからだと思うので、また来年度も時間がある時にこども臨床研究所に顔を出してもっと自分の大切にしたい事を明確にして行きたいと思いません。

岩木 茜

就職してすぐのスクーリングは、まだ慣れない仕事おわりに学校まで行くだけで精一杯だった。はじめのうち、子どもと関わることがあまりなかった私は、他の研修生と比べてエピソード

も書けないし、この研修生ということには私に意味があるのかと考えることもあり焦っていた。しかし時間が経つうちに、子どもと接していて悩みや考えたいことも出てきはじめ、スクーリングに行きみんなと話すのがなんだか心地よくなった。

たくさん保育園を見学に行くこともできた。様々な園を見たことで何を自分は大切にしていきたいかわかった気がする。それを持ち帰り再び考え、これからの保育に活かす。少しずつであるが、出来てきていると感じている。引き続きつづけていきたい。

はじめは、若竹に就職したいからという理由ではじめた研修生。「これを学んだ！」とは一言で言い表せないが、多くのことを考えることができ、さらにこれからも考えなくてはならないことがたくさんあることに気づくきっかけとなった。今まで何となくあまり大きなつまずきこともなく過ごしてきたあまり「考える」ということをしてこなかった。この一年考えを深めるということが難しく感じた。日々保育をしていく中で大切なことだと思う。これからも考え勉強し続け、今までの研修生での学びを活かし保育をしていきたいと思う。

また、この研修生制度では、人との関わりがどれだけ大切に気づいた。訪問先の人やお世話になった先生方、どの方も親身になって話を聞いてくれたりいろいろな話をしてくださった。こ

れからもそんな人たちとの関わりを大切にしていきたいし、広げていきたい。

.....

研修生は1年間、様々な経験をし、とことん保育について考えてきました。研修生をしていなくても、もちろん保育現場で日々働く中で様々なことを考えるのは当然のことです。しかし、一つの事例についてとことん考える時間を取れるかということ、なかなか難しいかもしれません。研修生はスクーリングで、一つの事例についてとことん考える時間をもち、いろいろな意見を聞く中で、自分の考えを明確にしていく。それを1年間通してやってきました。それに加え、様々な保育現場へ見学に行きました。見学に行くことで、自分の実践を振り返る機会になると共に、贅沢なことに、見学先の先生方と保育について話し合う場を設けてくださることもあり、様々な形で刺激を受けることになりました。これらのことは、とても貴重な体験だったと思います。また、研修生がレポートを書き終え、報告会で発表した時には自信に満ちて輝いている姿がありました。このような経験を経て、今、研修生からは、「研修生やってよかった」、「時々スクーリングに来ますね!」という声が聞かれます。学びはずっと終わらないと感じると共に、保育を学び続けることの面白さを感じているのだと思います。

卒業生のみなさん、働いてみて、ちょっと考えてみたくなったら、ぜひ研修生になる道も考えてみてください。そして、学生のみなさん、1年間このような形で学びながら働く道もありま

す。ぜひ卒業後の自分の姿の一つの候補として考えてみてください。研修生をやってみると、保育することが、前よりもちょっと楽しくなりますよ！



▲卒業式後の卒業パーティーで...43期生最後の全体集合写真▼





▲3月8日 研修生「学びの成果報告会」での姿  
 ▶自転車サークル(チャリサー) 犬吠埼で『ワン!』と吠える：銚子市犬吠埼灯台と明德間、総距離190km、総時間17時間かけて、6人で往復しました。詳しくはHPの「めいたんブログ」をご覧ください。

編集後記

この3月、43期生が本学から巣立って行きました。そして1期生となる研修生も1年間の研修を終え、保育者として一回り大きく成長して卒業して行きました。今、皆さんは既に辞令を受け取り、緊張、期待、不安や焦りを抱え、仕事に取り掛かっていることでしょう。「困っていたら、いつでも帰ってきてちょうだい。いいえ、別に困らなくても!」と、おそろくどの教員も口にはしていると思います。飛び方が充分でなかった若鳥も数名残っていますが、飛び出すのは本人の決心次第と時間の問題でしょう。成長するのに、時には後戻りすることも必要で、特に人間の場合そのような現象がよくあります。

短大の敷地内に、桜の木が10本以上あります。今年は寒い日が続きなかなか咲いてくれませんでした。今週になって一斉に花開きました。新2年生の授業は早々と4月1日に始まり、4人の女の子が昼休み中にお花見をしながらお弁当を食べていました。満開になった花を見上げ「美しいね」と見とれ、「入学式の時ここで写真撮りますか? そういえば思い出した! 私たちの時はすごい土砂降りです。リズム室で撮ったんだよね」と1年前の記憶を話してくれました。

この3月巣立った2年生が入学した春は異様に暑く、入学式の時は既に葉桜になっていました。ですから43期生は入るときも出るときも「同期のサクラ」はありませんでした。それでも大切な仲間を見つけ、初々しい若い大人として卒業して行きました。これからそれぞれの現場で、社会の一員として大切にされ、人を大切に、活躍して欲しいと思います。何れともあれ、少し落ち着いたら、お顔を見せて下さい! 困っていたら、その時もお顔を見せて下さい! (深谷)

4月の予定

- 3/31 新年度ガイダンス (2年生)
- 4/1 平成26年度授業開始 (2年生)
- 4/3 第45回入学式
- 4/7, 8 教科ガイダンス、オリエンテーション (1年生)
- 4/11 履修登録締切 (1年生)
- 4/26 オープンキャンパス  
第40回スターボックスお話しライブ  
「たいむ」オープンスペース
- 4/29 祝日授業 (2年生)
- 4/30 履修登録締切 (2年生)



発行：千葉明德短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel: 043-265-1613

Fax:

043-265-1627

mail: [tandai@chibameitoku.ac.jp](mailto:tandai@chibameitoku.ac.jp)

URL: <http://www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html>

編集

田中 葵

深谷 ベルタ

鶴田 真二



◀2年前の今頃...2012年4月4日の43期生 そして巡る春